

考古学からみた佐渡の交流

橋 本 博 文

はじめに

現在の新潟県の県域は、古代には越後国と佐渡国という二つの国域から成っていた。それを遡る古墳時代、さらにはその前代において、両地域はどのような関係にあったのだろうか。さらに周辺地域、ひいては中央大和政権と佐渡との関係を文化交流史という視点で、土器・集落・古墳などの遺物・遺跡のルーツから探ってみたいと思う。

佐渡における考古学調査・研究の歴史は、地元郷土史家による大正・昭和初期の活動に遡る。その後、昭和30年代の九学会連合による総合調査（中川ほか1964）や佐渡考古歴史学会有志による調査に継承される。さらに昭和40年代以降の全国的な高度経済成長期に開発行為に先行する「記録保存」というかたちで行政機関の主導のもと分布調査・発掘調査が行われ、遺物などの資料が蓄積されてきた。拙稿では、それら先人の調査・研究を振り返り、学びながら、上記のテーマを検討するものである。

1. 古墳時代前代の佐渡

1. 佐渡島における旧石器人の足跡

佐渡島に人が住み着いたのは今からおよそ17,000年前の後期旧石器時代といわれている。小木半島の南端の長者ヶ平遺跡からは珪質頁岩製の「ナイフ形石器」が採集されており、この時期の本州島からのヒトの渡来があったことがうかがえるとされてきた（本間・計良1988）。すなわち、本資料は縦長剥片を利用したもので、両側縁及び腹面基部に二次加工を加えており、従来杉久保型ナイ

フ形石器の変異形態と解釈されてきた。一方、側縁調整の角度が平坦であり、ナイフ形石器の側縁に施される刃潰し加工とは考えにくいことから「周辺調整の施される槍先形尖頭器」という評価もなされた(堅木1998)。しかし、背面は一見すると平行剥離の稜線に見えるリングが並行して走る自然面であり、後期旧石器を特徴づける石刃素材ではない(岡村・沢田2011)とまで否定されている。

ちなみに、同じく小木半島の八升ヶ平遺跡で採集された黒曜石製尖頭器について、北海道の旧石器時代最終末における尖頭器との類似性が石材をも含めて指摘されている(小熊・立木1998)。

とは言え、佐渡島では今のところ、旧石器時代に遡る確実な発掘資料はほとんど無いと言ってよい。

2. 縄文土器に見る本州島側からの文化の渡来

その後、同じく小木の岩屋山洞窟遺跡から現状で佐渡島最古の縄文土器である早期の貝殻・沈線文を特徴とする東北南部の常世式土器が出土している。さらに、縄文時代前期末の両津椎崎遺跡では東北、山形の吹浦式土器の特徴をもつ土器が出土しており、引き続き東北方面との結びつきがあったことが認められる。

佐渡島には、縄文時代に海を越えて外部からの異系統の土器が入ってきた。特に、縄文時代中期前葉には、西は新保・新崎式という北陸地方の土器が見られる。中期中葉から後期初頭にかけては対岸の本州島側から信濃川中流域にルーツをもつ火焰型土器や三十稲場式土器、さらに後期中葉には越後で稀な関東地方系の加曾利B式土器なども認められる。

一方で、藤塚式という、縄文を地紋にしない独自の貝殻条痕文をもつ土器が作られた(寺崎2002)。これは、真野湾等で採れるサルボウなどの放射肋の発達したアナダラ属の二枚貝の貝殻の腹縁を利用して施した条痕文様で、この時期としては、飛んで山陰地方の鳥取あたりに類例があり、そちらから海流にのってもたらされた可能性もある。しかし、能登には類例が少ないという問題がある。

このように、佐渡は絶海の孤島として孤立するのではなく、かえって海という水上交通によって盛んに外界と交流を重ねていたことが分かる。

3. 黒曜石からうかがえる縄文時代の交流

長者ヶ平遺跡では、黒曜石の石器やその製作途中でできた剥片あるいは碎片が拾える。これは同遺跡で黒曜石製の石器の加工が行われていたことの物証である。ここでは、漆黒色の黒曜石が目立つが、それは佐渡産の黒曜石の特徴である。一方で、透明度の高いガラスのような黒曜石製の石鏃も存在する。これは肉眼的に見て、長野県霧ヶ峰産の黒曜石の特徴である。ところで、その産地同定は科学的には蛍光X線分析法という物理化学的方法によって傍証される。それはすなわち、黒曜石中に含まれる元素レベルの量比によって原産地のものと比較し、産地をつきとめるという方法である。霧ヶ峰産の黒曜石の剥片・碎片類はほとんど採集できないので、あるいは透明度の高いガラスのような黒曜石製の石鏃は、製品というかたちで佐渡島内に搬入された可能性が高い（新大考研2003）。

黒曜石の蛍光X線分析では、縄文前期末から中期中葉の真野吉岡惣社裏遺跡では長野霧ヶ峰産が55%、同・和田峠産が10%、佐渡産が22%と実に約3分の2が長野方面の黒曜石で占められている。前期末から中期後葉の小木長者ヶ平遺跡では長野霧ヶ峰産が48%、佐渡産が46%で霧ヶ峰産と佐渡産が拮抗する。後期から晩期の金井二反田遺跡と中期前葉から晩期の両津セコノ浜遺跡では佐

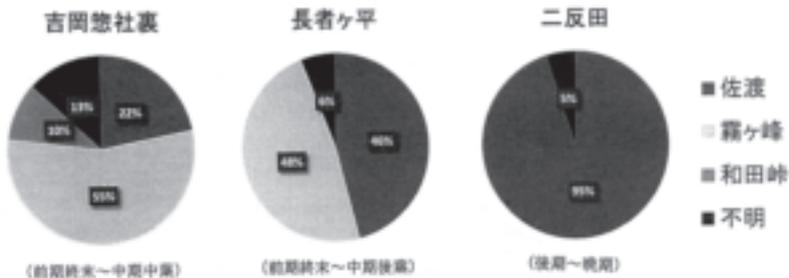


図1 佐渡島内遺跡出土遺物の黒曜石産地別使用比率（藁科ほか1988より作成）

渡産がほぼ100%の地元産という結果が出ている（藁科・東村1988）。このように、古い時期ほど遠隔地の黒曜石が入っており、新しくなると逆に地元、佐渡島内に産地が収束する傾向がある。この面白い現象は、縄文時代の寒冷化に従って、交流が低調になることを示しているものとみられる。

4. ヒスイの移動にみる交流

ところで、縄文時代には佐渡産の黒曜石が海を渡る一方で、他地域からの黒曜石や糸魚川産のヒスイなどももたらされた。糸魚川市長ヶ原遺跡では付近の姫川から採取されるヒスイをもとに縄文時代の玉作りが行われた。それはヒスイの原石や未成品の存在からうかがわれる。その中であって、同遺跡からは佐渡に特徴的な、片仮名の「コ」の字を重ねたような文様をもつ藤塚式土器の浅鉢が見られる。これは佐渡との交流があったことを示す物的証拠である。あるいは佐渡から舟に乗ってヒトがやってきているとみられる。それは何のためだろうか。おそらくヒスイの原石や製品を求めて糸魚川方面の人たちと交易をしに来ていたものと考えられる。一方で、佐渡市畑野の三宮（さんぐう）貝塚では良質なヒスイの垂飾りが採集されている。真野の藤塚遺跡では同じくヒスイの大珠が出土している。また、小木の長者が平遺跡ではヒスイの原石や大珠の未成品が確認されており、製品としてだけでなく、原石も海を渡って佐渡にもたらされ、そこで製品の玉に加工されたことがうかがえる。

5. 堂の貝塚6号人骨のイタチザメ歯製「ペンダント」から見てくると

佐渡には多くの縄文貝塚が残る。佐渡島のほぼ中央、真野湾から北に7km、両津港から南に7kmのほぼ等距離の地点に「貝塚」というバス停がある。こんな内陸部になぜ「貝塚」という名のバス停があるのだろうか。実はそこに堂ノ貝塚という縄文貝塚が存在するのである。新潟大学で所蔵している堂ノ貝塚や藤塚貝塚などの古人骨も出土している。特に、堂ノ貝塚の6号人骨は貝層の下から発見されたもので、その貝層の下の墓穴の中から屈葬人骨と共に、石鏃が13本とイタチザメという獰猛なサメの歯の歯茎に孔を3つ穿った「ペンダント」とされるものが見つかっている（図2）。このサメは映画、『ジョーズ』のサメ

のモデルとなったホホジロザメが温帯域に棲息しているのに対し、熱帯域に棲んでいるサメで、佐渡島からこのサメの歯を加工した製品が出土したということはどういうことだろうか。解答は幾つか考えられる。①当時は今よりもさらに温暖だった。②対馬暖流に乗って、沖縄の方からイタチザメが佐渡にやってきていた。③沖縄方面の縄文人が佐渡に漂着した。④沖縄方面と佐渡で交流していた。一などが考えつく。①に関しては、日本列島が今よりも温暖だったのは縄文早期の新しい時期から前期にかけての時期と言われており、当時の縄文時代中期前半の時期はそれほど現在と温度差は無かったものとみられる。②は現在でも時折、南方産の魚類等が漂着しており、可能性はある。③は堂の貝塚と同様のイタチザメの歯の歯茎に孔を3つ開けたものを模した貝製品が沖縄に確認されており、その可能性も捨てきれない。④は双方向の証拠が無い限り、証明できない。以上から、③の可能性を考えたい。

ところで、孔3つに関しては、ペンダントとして復元しようとしたところ、3孔開ける必然性がなく他の用途を想起させる。Ethno-Archaeology（民族考古学）的手法として、現代の先住民の民具資料に興味深いものが認められる。ドイツのベルリンの民族博物館には、同じくイタチザメ歯製の武器が展示されている（図4-1）。これには、歯茎に2孔ないし3孔を開け、そこに紐を通して曲がったシャフト（柄）の頭に1個装着し、イタチザメの独特な鉤形の歯を武器として使用しているのである。一方、フランスのペリゲー民族博物館にはオーストラリア先住民のものと思われる歯茎に2孔を開けたイタチザメの歯を多く連ねてネックレスにしたものが展示されている（図4-3）。日本の国立民族学博物館には同じくイタチザメの歯の歯茎に2孔を開け2列6個ずつ片側に並べて装着したパラオ諸島採集の円環の武器が所蔵されている（図4-2）。

堂の貝塚6号人骨例は胸の位置から出土していることと、縄文時代社会が武器を必要とした社会ではなかったという説に立てば、なぜ3孔なのかという問題はいまだに解決されないものの、ペンダント説は依然揺るがないものと考えられる。ちなみに、イタチザメの歯の歯茎に3孔を穿ったものは宮城県小里長根貝塚から、2孔を穿ったものは茨城県岩坪貝塚、石川県上山田貝塚から各々出土している（図3）。

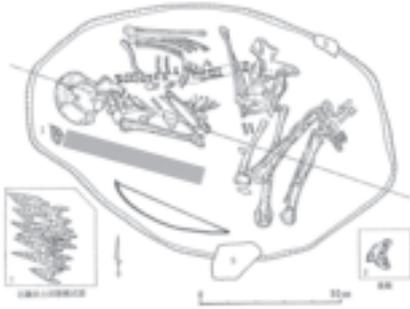


図2 佐渡市堂の貝塚6号人骨埋葬状況
(弓と矢柄は想定復元, 小片・森沢
1977改図)

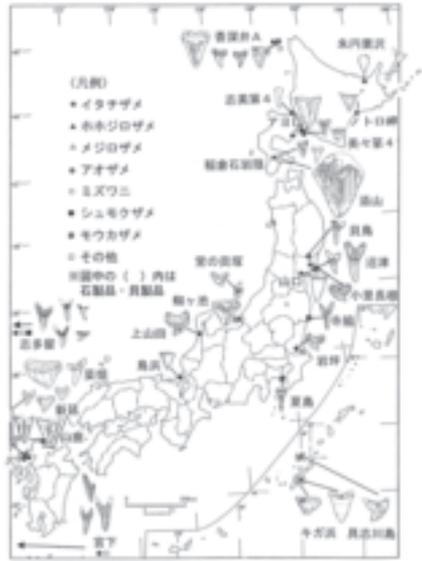
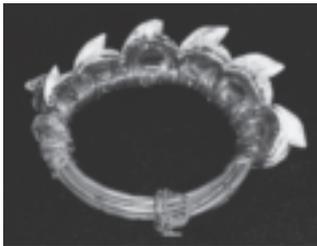


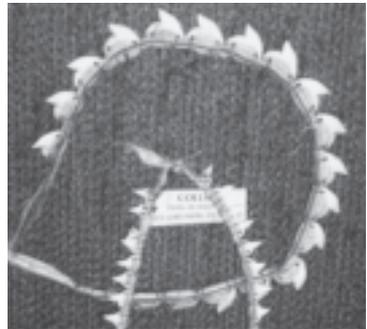
図3 日本列島におけるサメの歯製品
分布図 (長沼1984を基に作成)



1. ドイツ・ベルリン民族学博物館所蔵
イタチザメ歯製武器



2. 日本・国立民族学博物館所蔵
イタチザメ歯製武器
(パラオ共和国パラオ諸島で採集)



3. フランス・ペリグー民族学博物館所蔵
イタチザメ歯製ネックレス
(オーストラリアで採集)

図4 イタチザメ歯製品民族例

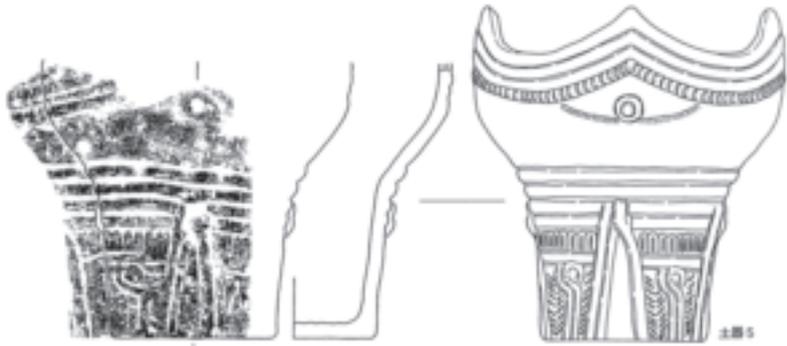
6. 海揚げりの縄文土器

佐渡島の東方約15kmの松ヶ崎沖の海底、水深約250mのところから1個の縄文土器が底引き漁中に引き揚げられた(図5土器5)。口縁部と胴部の上半部の一部を欠くもので、残存高18.4cmの小振りの深鉢であるが、底径は11.2cmある。4単位の波状口縁をもち、半截竹管文を主体とする文様を施文する。口縁部には半隆起線文と連続爪形文が施され、波頂部下に円形の押圧、その下に撚糸側面圧痕文がみられる。胴部上半に横位4条の半隆起線文、下半は縦位の半隆起線文で区画し、区画内上部に竹管による蓮華文、下部に渦巻状に入り組んだ隆起線文を施し、さらに綾杉文で充填する。底部には縦・横紐が直交した網代痕が認められる。縄文時代中期前葉の新崎式期のものである(小熊1998・鹿取・相羽2014)。ただし、文様要素に撚糸側面圧痕文をもつことから純粹の新崎式土器ではなく、東北地方南部の大木7b式土器の影響が認められるとされている(寺崎2014)。この土器が果たしてどこからどこに向かった舟から水中に没したものが注目されるが、佐渡島を介して北陸と東北の世界が繋がっていたことを示唆している。

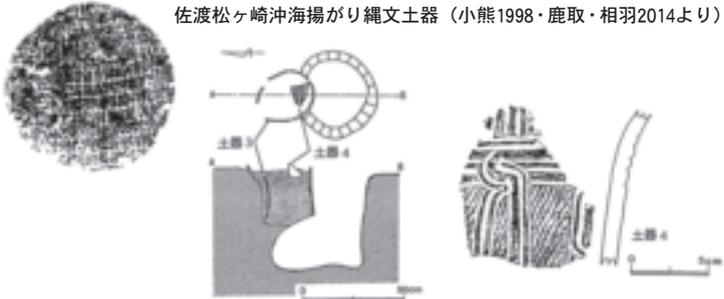
ところで、これとよく似た土器が先の佐渡市堂の貝塚から出土しているのである(図5土器3)。先述の6号人骨ではないが、4号人骨に伴うものと考えられ、残存高16.2cm、底径8.7cmとさらに小振りのものである(新大考研2003)。前者同様、波状口縁で、半截竹管による半隆起線文を主体とする。やはり、新保新崎式土器様式に特徴的な網代痕を底部に留める(小林1983)(註1)。このように、新崎式土器の佐渡島への伝播に伴い、ヒトも渡来しているのであろう。

7. アスファルトの移動

金井の二反田遺跡や畑野の三宮貝塚からは、晩期の大洞式の東北系の土器の他、基部に矢柄装着用のアスファルトの付着した石鏃が出土している。このアスファルトは佐渡島内では産出しないもので、弓矢になったもの、あるいはアスファルトそのものが石油産地である対岸の新潟や山形、秋田方面からもたらされたものとみられる。あるいは、外面ではあるが、アスファルトの付着した二反田遺跡出土の土器の存在から、アスファルトの島外からの搬入が想定される。



佐渡松ヶ崎沖海揚がり縄文土器（小熊1998・鹿取・相羽2014より）



佐渡市堂の貝塚4号人骨共伴土器出土状況（金井町教委ほか1977より）



佐渡市堂の貝塚4号人骨共伴土器（土器3・土器4）
および堂の貝塚表面採集土器（土器1・土器2）（新大考研2003より）

図5 佐渡松ヶ崎沖海揚がり縄文土器と佐渡市堂の貝塚4号人骨共伴土器の比較

8. 抜歯習俗の伝来

畑野の三宮貝塚1号人骨は縄文後期後葉のものとされるが、当時の習俗である抜歯の痕跡が認められる(註2)。上顎左右第2切歯(側切歯)を抜去した熟年男性である。この抜歯様式は、中期末葉、仙台湾周辺に出現し、後期初め頃、東北において多少盛行したものである。関東地方には、後期前葉に出現する(春成1982)が、東北系土器(大木式土器)の当地への波及と合わせて、東北地方からの影響がうかがわれる(橋本1999a)。三宮貝塚出土土器には晩期になると東北系土器が確認できる。あるいは逸早く東北地方の人が佐渡にやって来たか、東北地方とも交流があった可能性が考えられる。

9. 弥生時代の佐渡特産品、赤色・緑色管玉の流通

弥生時代の中期になると島内に産出する赤玉石と称される鉄石英や碧玉などを利用して当時全国最大規模の玉生産が行われた。国土地理院の5万分の1地形図を見ると、両津の東海岸には「赤玉」という地名が見られる。そこでは赤い色をした美しい石が拾える。佐渡の土産物屋の店先の工芸品や石屋に置かれている庭石などで見かけるものである。その「赤玉」は弥生時代人にとっても大変魅力だったようで、それで作られた細身の管玉は、西は山陰地方の鳥取、北は北海道、日本海側だけでなく中部地方の長野からさらに太平洋側の千葉や東京まで広域に分布している。特に、赤塗りの土器の卓越する中部高地の箱清水式土器の文化圏では濃密な分布がみられる。

佐渡の国中平野では畑野の一宮(いっくう)橋の欄干にモニュメントとしてカエルの置物と球体を取り付けられているが、それらは赤玉・黄玉・碧玉から作られており、その石材の産地は、その橋の架かる小倉川の上流の猿八というところにある。その赤玉と碧玉で作られた玉が新穂の玉作遺跡群で大量に作られた。そのうちの一つである平田遺跡では、玉作工程の未成品・完成品ばかりでなく、土器や石器が出土しているが、その中に面白い土器と石器が含まれている。中部高地の長野方面の土器である弥生中期の栗林式土器と特産品の閃緑岩製の磨製石斧である(註3)。これらは北信の中野市周辺で作られた可能性が高い。一方で、長野県内では佐渡の赤玉石製の管玉が多く認められる(図6)。



図6 鉄石英製管玉出土分布図 (橋本2004b改図)

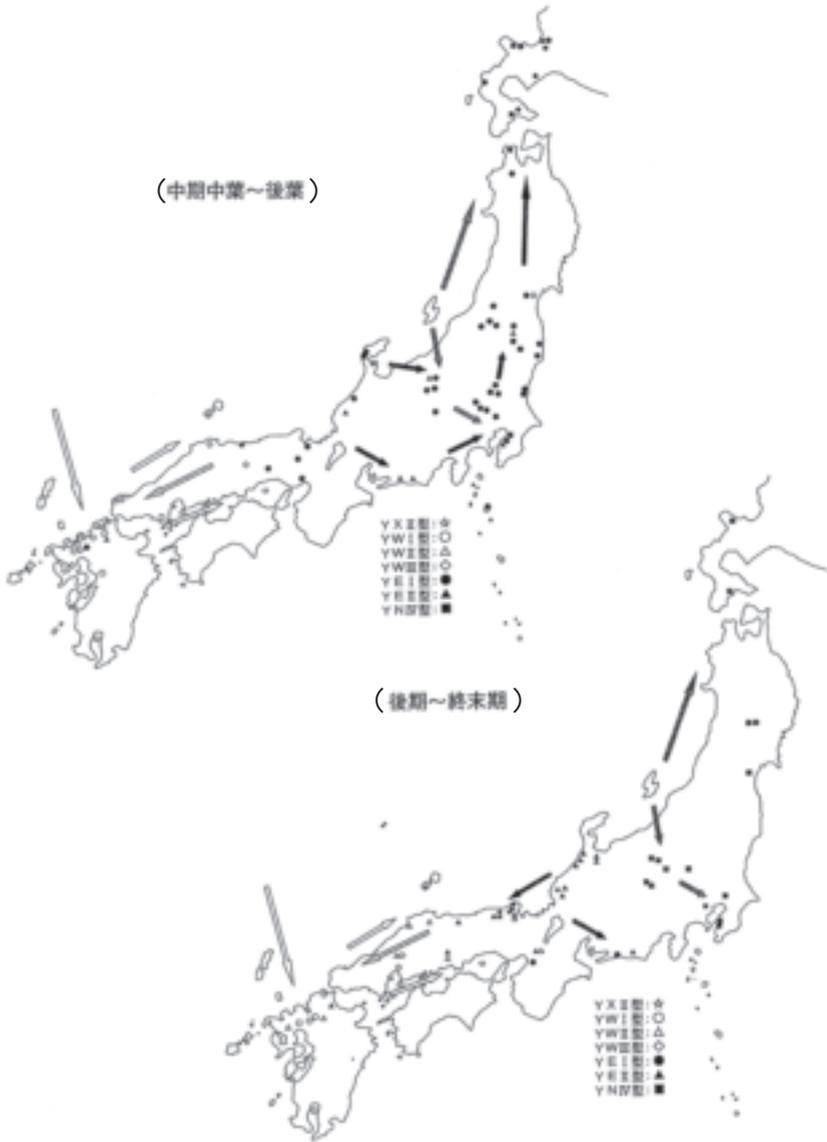


図7 碧玉製管玉の流通関係 (大賀2001より)

佐久市の天王垣戸遺跡では地元箱清水式の赤く塗った蓋付き土器の中から大量の赤玉石製管玉が出土している。現在、東京国立博物館に収蔵されているが、これらは佐渡からもたらされたものであろう。

ところで、鉄石英製管玉だけでなく、佐渡猿八産のものと考えられる碧玉を利用して製作した管玉も中期から後期（終末期）にかけて、同様な分布をしめすことが蛍光X線分析の結果から指摘されている（図7）。

なお、佐渡の弥生時代中期中ごろから後半には、竹の花式土器と呼ばれる北陸の小松式土器と酷似する土器が存在する。北陸地方とのつながりが強いっぽうで、先の中部地方の長野栗林式土器や東北の福島方面系の川原町口式土器、秋田方面系の宇津ノ台式系の影響を受けた土器が相川の浜端海蝕洞穴遺跡などから出土している（図8、齋藤2012・石川2013）。その他、新穂玉作遺跡出土資料、佐渡市平田遺跡出土資料、新保川東遺跡出土資料の天王山式土器に伴うとみられる特徴的なアメリカ式石鏃が存在する。加えて羽茂番匠屋敷出土とされる資料が新穂歴史民俗資料館に収蔵されている。東北方面との交流がこの時期にもうかがえる。

10. 弥生時代～古墳時代初頭にかけての佐渡のト骨

当該期の島外との交流を示す資料の中にト骨資料がある。島内では、海蝕洞穴の浜端遺跡と千種（ちぐさ）遺跡の出土資料が知られている。全国的に見ると、最も濃密に分布するのが、南関東、神奈川の三浦半島における海蝕洞穴からの確認例である。さらに東京湾対岸の房総半島からの出土例がある。これらは、弥生後期を中心とする資料で、佐渡と同様、ニホンジカの肩胛骨を主に使用している。ただし、その他イノシシや新しくなるとイルカの子骨も利用されている。焼灼形式として、神澤勇一氏の提唱された第Ⅲ形式が島内では共通してみられる（神澤1976, 1983）。この習俗の伝播に当たって、南関東から海上交通で佐渡に伝わったとは言いがたく、むしろ、佐渡産の玉類の分布からみると、南関東から中部高地を介して、佐渡にもたらされた双方向の交流の結果という考えも成り立ちうる。

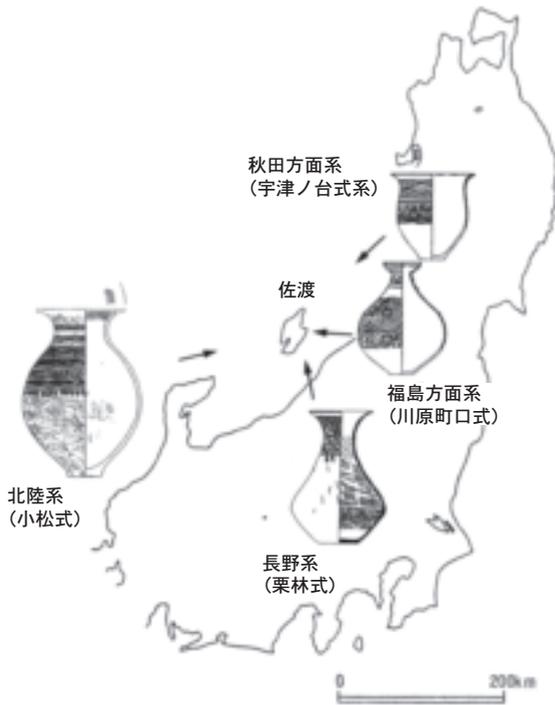


図8 弥生時代中期中頃～後半までに佐渡島に入った4つの系統の土器

II. 古墳時代前期の佐渡

1. ヤマト政権の影響 — 威信財の発見 —

新穂の蔵王遺跡では掘立柱建物跡や平地式建物跡が複数確認された。そのうちの5号掘立柱建物跡の付近から銅鏡2面と銅鏃と鳥形土製品が発見された。このような威信財が古墳からではなく集落跡から見つかることは稀である。あるいは蔵王遺跡は一般集落ではなく、豪族居館の可能性もある。

銅鏡2面はいずれも仿製鏡であるが、そのうちの1面は、ほぼ完形に近い八葉の内行花文鏡である。中国後漢の長宜子孫銘内行花文鏡をモデルにして当時の倭で製作された初期のものである。もう1面は破片ながら珠文の1列に並ぶ

古式の珠文鏡である。このうち前者は大きさや文様が群馬県高崎市芝崎蟹沢古墳のものと酷似している。芝崎蟹沢古墳からは他に「正始元年」銘三角縁神獸鏡が出土している。「正始元年」は中国三国時代の魏の年号で、西暦の240年に相当する。いわゆる魏志倭人伝、『魏志』東夷伝倭人条に見られる卑弥呼の魏への遣使の年は景初3年(239)で、正始元年はその翌年に当たる。このように、直接的ではないが、間接的に佐渡が卑弥呼の時代・文物とリンクしてくる。ちなみに、蔵王遺跡の1間×1間の掘立柱建物、SB1の礎板に使用された木材の年輪年代や東沢遺跡出土の木材の年輪年代分析・年輪酸素同位体比分析により、佐渡の古墳時代早期・前期の一定点が3世紀代にあることが明らかになっている(山口2006・鹿取2015)。

他に蔵王遺跡で注目されるものとして鳥形土製品がある(図9)。1点は鶏冠の欠損したA類、もう1点は鳥形土器(E類)の可能性もある。新潟県内では対岸の新潟市秋葉区の新津八幡山遺跡の弥生時代後期高地性環壕集落から1点の鳥形土製品E類(鳥形土器)、古墳時代前期の同市西蒲区御井戸(おいど)遺跡から1点の鳥形土製品D類(鳥船形土製品)が出土している。この種の鳥形土製品の中には明らかに赤い鶏をかたどったものA類(鶏形土製品(中実))が含まれる。それらは日本海側を中心に分布し、会津盆地にも到達している。その中には石川県吹坂(すいさか)丸山1号墳例のように方墳のほぼ各辺中央の堀中から出土したものもあり、原位置は墳丘上であろうが結果として機能していたことをうかがわせる(橋本1999b)。

また、前期の遺物の中でガラス小玉の分析をとおしてその搬入経路が検討されている点は重要である(鹿取2015)。すなわち金井の東沢遺跡と新穂の蔵王遺跡のそれぞれのガラス小玉の成分の違いから異なる搬入経路が想定されている。ちなみに前者がコバルト着色カリガラスで分布の中心は関東南部と北部九州にあっていずれかのルートにより、後者は銅着色カリガラスで畿内に分布の中心があり、日本海ルートにより直接もしくは丹後・能登等を経由してもたらされたと考えられている。なお、佐渡島から見て対岸の弥彦村稲葉塚古墳採集のガラス小玉(古墳時代前期)、新潟市西蒲区大沢遺跡4号住居址壁溝内出土のガラス小玉(弥生末～古墳初)も銅着色カリガラス(新免2016)で、新穂の蔵



図9 鳥形製品出土分布図(橋本1999b改図)

王遺跡のものと同様、日本海ルートで搬入された可能性が高い。

なお、金井の千種遺跡からは弥生時代末から古墳時代前期のものと思われる舟形木製品が出土している(大場1953)。この種の舟形木製品や土製品は古墳時代前期を中心に対岸の越後を含めて広く認められる。水上交通の安全・無事を祈った祭祀に使用されたものと考えられる。

ところで、蔵王遺跡からは独立棟持柱付き掘立柱建物跡、6号掘立柱建物跡が確認されている。この種の建築様式は弥生銅鐸絵画や土器絵画、豪族居館内部、祭祀場、新しくは遷宮で知られる伊勢神宮の倉庫建築、御稲御倉(みしねのみくら)などに認めることができる。その豪族居館の例では、同じ古墳時代前期の福島県いわき市菅保B・折返A遺跡で1間×3間のものが確認されている。身近なところでは、新潟市中央区の新潟市役所に隣接する白山神社の中に新潟地震直後に移築された伊勢神宮の御稲御倉がある。ただし、厳密にはこれには妻側短辺の壁中中央に柱が入る。これは変容したかたちとも理解される。すなわち、これらは祭祀性をもった種籾貯蔵のための倉庫である。

さらに、蔵王遺跡の掘立柱建物址の構造が注目される。その中に布掘り建物が含まれるが、石川県金沢市大友西遺跡・戸水B遺跡・塚崎遺跡などとの関連性が示唆される(橋本2004a)。今後、上越市釜蓋遺跡等と共に礎板・枕木の技術系譜の究明が課題である。

当該期の建物に関しては、国中平野の沖積地に立地する東沢遺跡・晝場遺跡・帆柱川遺跡・蔵王遺跡・二宮加賀次郎遺跡などの「方形区画溝」の存在も注目される。類例は弥生時代では九州・四国・近畿・北陸に、古墳時代では中・後期の関東にあるとされ、新潟では佐渡以外に糸魚川市内の沖積地に限定されるとし、佐渡と共にいずれも古墳時代前期の所産とみて弥生後期の富山・石川両県例よりも遅れて普及する可能性を指摘している(鹿取2015)。ただし、最近上越の沖積地に在る弥生時代末～古墳時代初頭の釜蓋遺跡で発見されている。

一方、真野の浜田遺跡からは新潟シンポジウム編年(川村1993)5～7期の7.2×7.4mの大型竪穴住居跡が確認されている。そこからは後述する相川の鹿伏山(かぶせやま)でも見られた威信財の銅鏃と碧玉製管玉未成品が出土している。弥生時代に佐渡で盛行した玉作は古墳時代前期になると殆ど確認できな

くなるが、その中であって浜田例は玉作を掌握した有力者の存在を暗示させる。大型竪穴住居は豪族居館を構成する一要素である。なお、浜田遺跡出土銅鏃に関しては、その形態的類似性から、能登の雨ノ宮1号墳例との関連性が指摘されており、雨ノ宮1号墳被葬者が倭政権から配布されたものの中から再分配したものという解釈がなされている（小黒2006）。

2. 前期古墳の存在の可能性 — 鹿伏山 —

宮内庁書陵部に伝わっている「新潟県佐渡郡相川町鹿伏山出土品」については、小黒智久氏が詳細な検討を行っている（小黒2000）。前期古墳の副葬品セットとしてピックアップしたもののうち、碧玉製車輪石は古墳出土例、あるいは古墳出土例の可能性のあるものとして分布の東限域の例となる。車輪石は古墳以外に玉作遺跡や居館関連遺跡などからも出土するが、それらは普通破片として出土する。一方、鹿伏山例は完形品であり、かつその他の磨製石剣や銅鏃と共に赤色顔料が付着している。新潟県内では胎内市城の山（じょうのやま）古墳でお馴染みになったように古墳被葬者の遺体周辺に赤色顔料が撒かれ、魔除けとして機能していたようである。すなわち、これら赤色顔料の付着した遺物は古墳の副葬品であった可能性が高いということになる。先行する弥生時代に南方産のオオツタノハに孔を開けて作った貝製腕輪を祖形とし、古墳時代前期に軟質の石材である緑色凝灰岩などを利用して真似て製作したものとみられている。近畿地方を中心に多く分布し、地方にいくにしたがって少なくなる（図10）。倭政権の勢力伸長に伴って配布されたものと考えられる。威信財の一種とみられる他に祭器としての使用も奈良県島の山古墳の前方後円墳前方部埋葬施設の粘土槨で確認されている。

また、銅鏃も石鏃から鉄鏃への変遷の中で一時、実用品の武器として使用されたというよりは、やはり宝器として扱われていたようである。前者同様に畿内を中心に多く出土し、おおよそ地方に向かうにしたがって遞減した分布が認められる（小黒2000）。佐渡では他に先の蔵王遺跡や浜田遺跡で出土しているが、これら遺物の在り方は、ヤマト政権が地方支配を進めるのに当たって地方の有力豪族に威信財を分与したことを示していると考えられる。もう一つ、珪

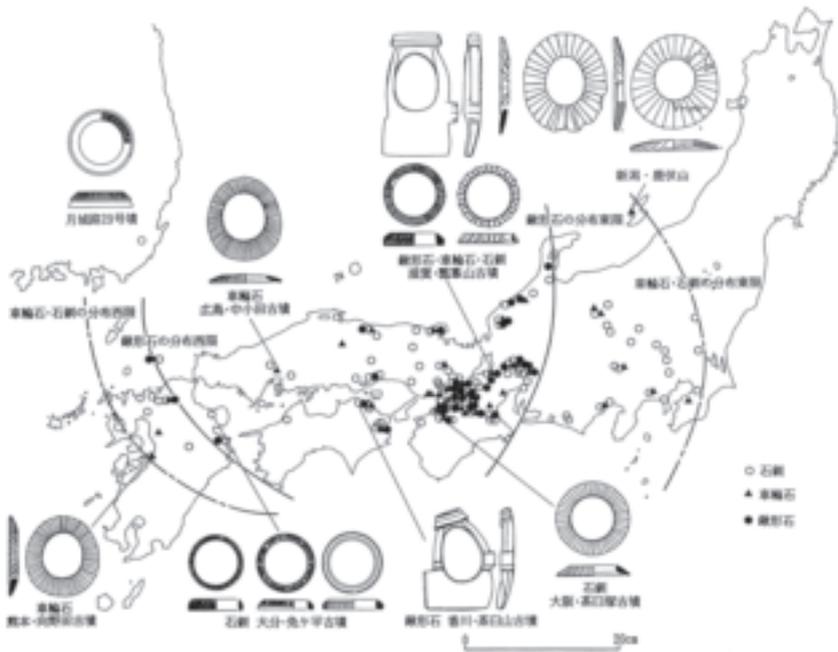


図10 腕輪形石製品の分布（新納・北條1992，東 潮1992，小黒2000合成）

化木製の磨製石剣があるが、素材の珪化木は新穂の瓜生屋など佐渡島内でも産出する。しかしながら製作地を島内・外に特定できる段階には至っていない。いずれにせよ、これまた威信財と言えよう。以上より、佐渡にも古墳時代前期から有力豪族が蟠踞し、ヤマト政権の東方進出に力を貸していたものと考えられる。

3. 土器から見た弥生時代～古墳時代前期の佐渡の交流

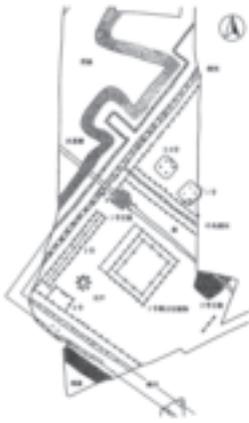
新潟シンポジウム編年1期以前は、東北・信州・北陸等の異系統の土器から構成される。ところが、1・2期になると、汎北陸的な土器様相に統一される。3・4期も同様であるが、特に能登との共通性が顕著となる。5～8期は東海系譜の器形が主流となり、外来系土器の出現・定着が進む。9・10期は屈折脚

高坏の出現など畿内系土器様式が成立する（尾崎2005）。

Ⅲ. 古墳時代中期の佐渡

今のところ、佐渡島では前期古墳はおろか中期古墳の存在も知られていない。だからといって、当時佐渡には人が住んでいなかったわけでもなく、居住の痕は確認されている。国中平野の低地部には畑野の竹田沖遺跡や金井の晝場（ひるば）遺跡、帆柱川遺跡、浄玄堂橋遺跡、東沢遺跡など前期から中期にいたる集落遺跡が発見されている。そのうち、竹田沖遺跡では高坏や小型丸底埴、手捏ね土器などの土師器、土掘子・横槌・鍬などの木製農具の他に大刀・剣形の木製模造品、建築部材、護岸の杭、シガラミなどが出土し、水辺の祭祀跡と推定されている。中心は6世紀かとされるが、5世紀に入る可能性が高い。東沢遺跡からは長さ3mを超える大型木槽樋が見つかり、出土層位からそれが前期から中期に下る可能性も指摘されている。古墳時代において、木槽樋は水の祭祀に伴う導水施設から確認されている（図11）。ただし、トイレ説や産屋説なども存在する（黒崎1999）。早期の奈良県桜井市纏向（まきむく）遺跡、中期の同県御所（ごせ）市南郷大東（なんごうおおひがし）遺跡などが著名な例で、古墳時代の豪族居館で知られている群馬県高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡では中期の居館内部の導水施設で、その実物こそ検出されなかったが、設置された痕跡が認められる。一方で、囲形埴輪に伴う導水施設をかたどった埴輪が三重県松阪市宝塚1号墳や大阪府心合寺山（しおんじやま）古墳などから出土し、脚光を浴びている。よって、今後、佐渡で居館の確認される可能性すらあるのである。なお、最近朝鮮半島の韓国東林洞遺跡で三国時代の木槽樋が発見された（湖南文化財研究院2007）。今後、日本列島の出土例との系譜関係の追究が期待される。

ところで、晝場遺跡からは糸魚川あたりで作られた可能性のある蛇紋岩製の勾玉の他に、中期の土製の勾玉が出土している。土製勾玉というと、昨年の新潟市東区牡丹山諏訪神社古墳の第2次発掘調査で墳頂部から意図的に中心部とその東・南・北に置かれた状況で赤色顔料の付着した土製勾玉が計4点発見されている。こちらは5世紀前半の中期古墳の葬送儀礼に使用されたもので、晝



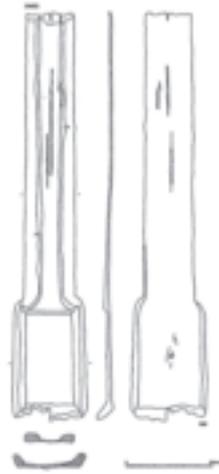
1. 群馬・三ツ寺 I 遺跡



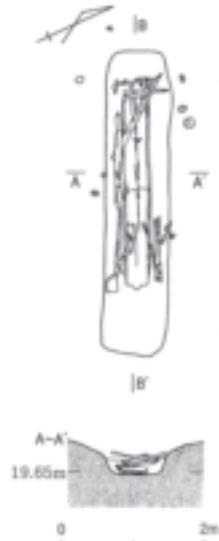
2. 奈良・南郷大東遺跡



3. 滋賀・服部遺跡



4. 新潟・東沢遺跡



5. 韓国・東林洞遺跡

図11 木槽榑集成図

場遺跡出土例も同時期の祭祀に使用された可能性が高い。ちなみに、土製勾玉は新潟県内では他に南魚沼市余川中道遺跡の同じく古墳時代中期の包含層から出土している。また、分布は朝鮮半島韓国の全羅南道海南群谷里遺跡にまで及んでいる。

また、晝場遺跡や帆柱川遺跡からは、5世紀から6世紀にかけての中～後期の比較的古い須恵器が少量ながら確認されて注目される。

他に、佐渡島内では、真野の小布勢神社と金井の新保川東遺跡の古墳時代中期（5世紀前半）と考えられる遺物に滑石製の子持勾玉がある。出土状況こそ不明であるが、重視される遺物である。子持勾玉は本州島をはじめ、島嶼では世界遺産登録の国内推薦が昨年決まった福岡県沖ノ島遺跡、朝鮮半島の韓国順天月山里半月遺跡でも出土が知られている。豊作を祈る農耕祭祀に使用されたと考えられる一方で、多産、集落の繁栄などを願った祭祀や航海の安全などを祈った祀りにも使われたとみられ、古墳の他に群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡や同・原之城遺跡など豪族居館内部からの発見例も散見される。先の小布勢神社は延喜式内社で、『新潟県史』では、「神社成立前の古代祭場の一端を示すもの」（新潟県1983）としているが、越後側でも同様に延喜式内社である妙高市斐太（ひだ）神社境内地から多量の子持勾玉が出土しており、類似性がうかがわれる。

なお、帆柱川遺跡の1間×2間の掘立柱建物、晝場遺跡の2間×2間の掘立柱建物4棟も注目される。時代・時期の上で確証はなく、この時期とは確言できないものの、2間×2間の総柱建物は14期（TK47型式併行）に新潟市笹山前遺跡に見られ、倉庫と考えられている（滝沢1999）。晝場遺跡の場合、5間×5間の総柱建物は中世に下るとしても、その向きや柱穴の様相、構造等から古墳時代中期と考えてもよいのではなかろうか。遺構の切り合い関係で重複のある方形区画溝よりは新しいとしているが、それを前期とすれば矛盾は無く、柱穴内出土遺物も否定材料にはならない。すると、これら倉庫としての機能、ひいては遺跡の性格が注視されてくる。

一方、中期の遺跡・古墳の確認例が現状で少ないか皆無であることから、それを自然環境の変動と結び付けて考える説がある（藤田1990）。すなわち、千種遺跡で確認された古墳時代前期の包含層の上にある厚い沖積状堆積物から國中

平野に潟湖の形成を唱える説である。はたしてそれが正しいのか考古学的検討と合わせて自然科学的検討も課題である。ただし、この時期の水辺の祭祀の盛行は、その背景に自然環境の変動があり、それと連動している可能性もあることを指摘しておきたい。

土器としては、この時期畿内系の屈折脚高坏と埴を中心とした組み合わせで、地域色が薄れ全国的な斉一性のもとに存在する。

IV. 古墳時代後期の佐渡

初期横穴式石室の伝播（図12）

現在、佐渡で確認されている最古の古墳として台ヶ鼻古墳（滝川2007）が候補にあげられている。それは、出土遺物からではなく、その横穴式石室の形態・構造的特徴からである。すなわち、玄室・羨道共にその壁面を小振りな自然石で築き、狭長な羨道をもつことから初期の横穴式石室の範疇でとらえられている。その年代は、新潟県域では下越・村上の浦田山古墳群2号墳に次ぐ県内2番目に古い横穴式石室とのことで、6世紀前半代と考えられる（小黒1999）。その立地は二見半島の南端、現・台ヶ鼻灯台の下に位置し、航海上のランドマークになる場所である。海上交通を掌握した被葬者像がうかがわれる。ところで、その横穴式石室の系譜として、朝鮮半島を淵源に北部九州から若狭・越前・加賀・能登などの北陸日本海沿岸を經由して伝わったとされる浦田山2号墳の竪穴系横口式石室の影響のもとに成立したとされている（小黒1997）。特に玄室に見られる腰石や力石の技法的類似性が指摘されている。しかし、両袖型のタイプは異なる系譜が推定される。その後、小黒氏は台ヶ鼻古墳の石室の祖型として、遠く九州肥前の玉葛窟古墳石室との酷似性を指摘し、「唐津湾から真野湾へと工人集団が長距離移動したことを示す好例」（小黒2013・2014）とまで言い切っている。ちなみに、隣接地の中部高地や北関東などでは初期に一部片袖の畿内系石室が認められるものの、両袖型横穴式石室の導入が目立つ（図12）。今後、朝鮮半島南部をも視野に、系譜関係の検討が課題であろう。なお、台ヶ鼻古墳はその直径15mの墳丘規模に対して石室の規模がアンバランスに大きく、

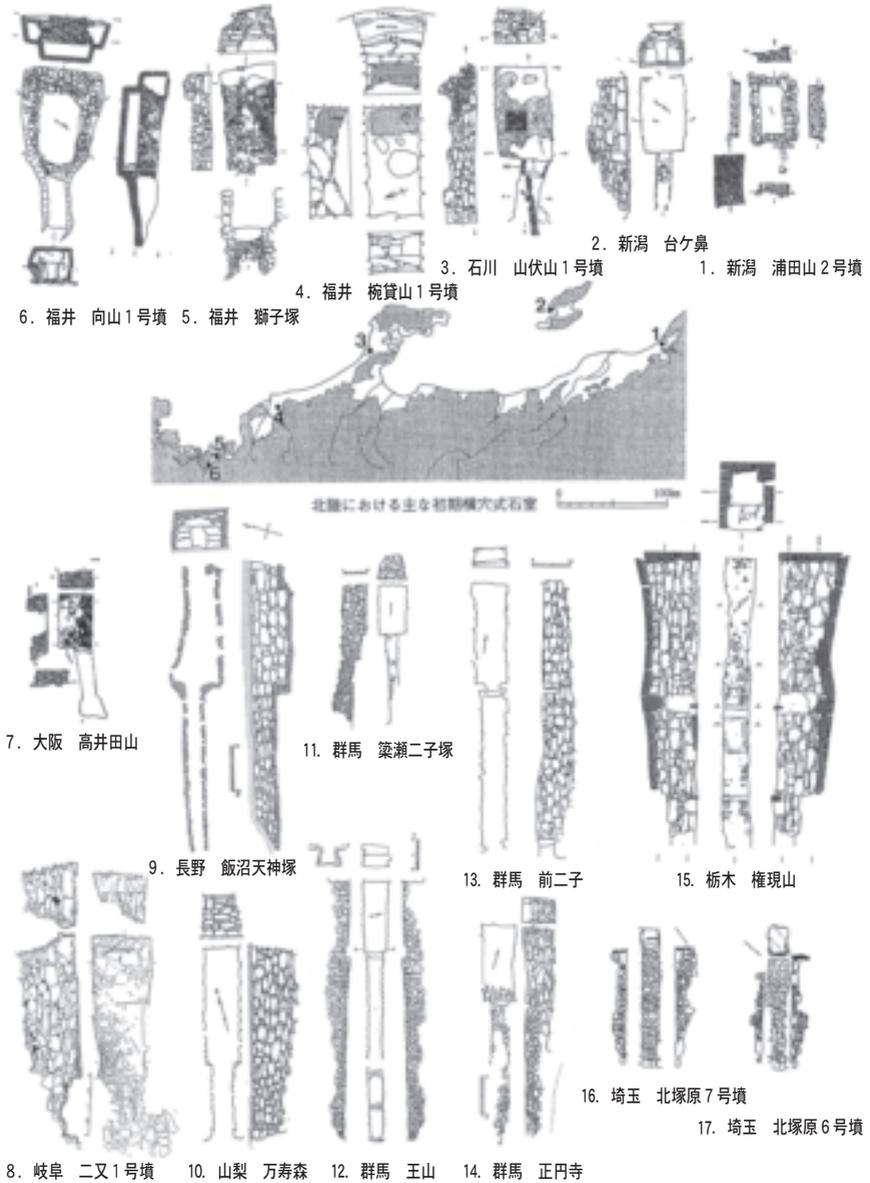


図12 北陸とその周辺地域の初期横穴式石室（相田1999ほか合成）

特に玄室面積では新潟県内最大級となる。当該期、被葬者は佐渡の最高首長の地位にあったことは疑いえない。

同じ相川の橘古墳も注目される古墳である。直刀、鉄鏃、弓金具などの武器をはじめ、碧玉製管玉・水晶製切子玉などの装身具が出土している他、鉄製U字形鋤先・曲刃の鉄鎌などの土木具・農具も副葬されており、被葬者は武人的な性格に加えて農耕にも基盤を置いた人物と考えられる。石室全長は約7m、玄室長も約4mと佐渡島内でも最大級の横穴式石室をもち、一時6世紀後半の佐渡を代表する被葬者が想定される。

なお、二見半島の相川では、台ヶ鼻古墳（MT15型式併行）と橘古墳（TK43型式併行）の間に出土須恵器からみて谷地3号墳（TK10型式併行）（佐藤1998）が入る。

V. 古墳時代終末期の佐渡

群集墳の形成と横穴式石室の系譜の違い

佐渡では、古墳時代後期から終末期の6、7世紀にかけて直径10m前後の小規模な円墳の群れからなる群集墳が形成される。分布は真野湾の東岸域を中心として、二見半島の西岸域、そして両津湾岸の計3地域に集中する。これらのうち、真野湾東岸域のケラマキ古墳群からは刀傷のある殺傷人骨も確認されている。実際に戦闘行為が行われていた可能性が示唆される。また、製塩土器も出土しており、塩作り集団との関連性も指摘されている。

ところで、これらのうち立地の相違から、その伝播経路の違いを想定する説がある。すなわち、真野湾岸の古墳と能登・若狭、そして両津湾沿岸域の古墳群と東北との各々の関わり（春日2002）という魅力的な説であるが、今後、土器の系譜をも含めて横穴式石室間の具体的な比較検討作業が課題である。

一方で、首長墳としては、小木半島、真野湾東岸域に在った飯田清次郎古墳が重要である。直径20mほどの円墳で、陶邑TK209型式併行の須恵器を副葬し、7世紀前葉の時期が想定されるが、その時期の古墳としては島内最大の古墳である。金銅製耳環を3対副葬し、追葬がうかがわれる。なお、断片的な副

葬品ではあるものの、長さ不明ながら刃幅4.5cmもあるような大振りな直刀も存在するようであり、被葬者は佐渡を代表するような人物であったことが想定される（橋本ほか2009）。あるいは、文献に登場する「佐渡国造」に擬定される人物かとも考えられる。

おわりに

最後に、『日本書紀』欽明天皇5年（544年）12月の肅慎の佐渡漂着記事（越國言。於佐渡嶋北御名部之碕岸有肅慎人。乘一船舶而淹留。春夏捕魚充食。彼嶋之人言非人也。亦言鬼魅，不敢近之。）と考古学的資料のつき合わせが今後の課題であろう。

拙稿は、2014年度に実施された新潟大学テレビ公開講座の『佐渡の交流』の一部を担当した筆者の台本と、2015年11月14日に佐渡市で開催された『古墳時代佐渡の交流』のシンポジウムでの筆者の基調講演の発表要旨に手を入れたものである。

資料収集等に当たって齋藤瑞穂・相田泰臣・鹿取 渉・高橋正平・滝川邦彦・池 榮培の各氏のお世話になった。末筆ながら、この場をお借りして深甚なる謝意を表す。

〈註〉

（註1）堂の貝塚4号人骨に伴うとされる縄文土器片が報告書（金井町教委ほか1977）に掲載されているが、その胴部個体も半截竹管による半隆起線文をもち、先に紹介した新潟大学受け入れ資料と同様な楕円形の半截竹管で描いた半隆起線文が描かれているようである。ただし、地紋の縄文はLR縄文で、新潟大学受け入れ資料のRL縄文とは異なるので、別個体と判断される。いずれにせよ同一型式のものと推断される。なお、「網代痕」はモジリ編み痕であろう。

（註2）三宮貝塚出土抜歯人骨は現在、新潟大学旭町学術資料展示館に展示されている。

(註3)新潟県埋蔵文化財調査事業団, 高橋保氏より御教示を得た。記して謝意を表する。

〈参考文献〉

- 相田泰臣2015「越後の古墳と潟湖」『日本海の潟湖と古墳の動態—北陸からの視点—』研究集会 海古墳を考えるV(福井) 予稿集:33-44 研究集会「海古墳を考えるV」実行委員会
- 相田泰臣1999「横穴式石室の伝播—浦田山古墳群—」『環日本海地域の自然・人・文化』:107-109 新潟大学
- 青柳泰介2010「ヤマト王権と水のまつり～導水施設と囲形・家形埴輪からみた権力基盤～」『導水施設と埴輪群像から見えてくるもの』:96-109 滋賀県立安土城考古博物館
- 東 潮1992「古墳時代 9 対外交流」『図解・日本の人類遺跡』:188-191 東京大学出版会
- 石川日出志2013「特論1 弥生時代の新潟県域」『弥生時代のいしがた』:77-80 新潟県立歴史博物館
- 今尾文昭2003『カミによる水のまつり』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 大賀克彦2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号:1-42 日本考古学会
- 大場磐雄ほか1953『千種』新潟県教育委員会
- 小片 保・森沢佐歳1977「人骨所見」『堂の貝塚』:53-57 金井町教育委員会ほか
- 岡村道雄・沢田 敦2011「佐渡島長木の「猿人文化」と長者ヶ平遺跡の「ナイフ形石器」」『新潟考古』第22号:1-22 新潟県考古学会
- 小熊博史・立木宏明1998「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第9号:133-149 新潟県考古学会
- 小熊博史1998「佐渡海峡から揚陸された縄文土器」『長岡市立科学博物館研究報告』第33号:103-114 長岡市立科学博物館
- 小黒智久1997「越後・佐渡の横穴式石室と前方後円墳」『シンポジウム 横穴式石室と前方後円墳』東北・関東前方後円墳研究会
- 小黒智久1999「横穴式石室」『新潟県の考古学』:273-278 新潟県考古学会編 高志書院
- 小黒智久2000「宮内庁書陵部所蔵の「新潟県佐渡郡相川町鹿伏山出土品」の研究」

- 『新潟考古』第11号：95-110 新潟県考古学会
- 小黑智久2006「古墳時代前期の佐渡と能登—佐渡の古墳時代銅鏃の再検討を中心として—『新潟考古』第17号：129-157 新潟県考古学会
- 小黑智久2009「新潟県村上市浦田山2号墳石室の再検討」『新潟県の考古学』Ⅱ：379-398 新潟県考古学会
- 小黑智久2013「横穴式石室」『若狭と越の古墳時代』：61-68 雄山閣
- 小黑智久2014「新潟県佐渡市台ヶ鼻古墳石室の再検討」『古代学研究』202：1-29 古代学研究会
- 尾崎高宏2005「佐渡地域の弥生後期～古墳時代前期の動向について」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』：27-34 新潟県考古学会
- 春日真実2002「佐渡の古代土器」『まほろばの時代』佐渡歴史民俗叢書Ⅱ：25-57 両津市郷土博物館
- 春日真実2013「考古資料から考える大宝二年の越中国四郡分割」『平成24年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』：151-166 新潟県教育委員会
- 鹿取 渉2011「佐渡市 東沢遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第23回大会研究発表要旨』：25-31 新潟県考古学会
- 鹿取 渉2015「佐渡の弥生～古墳時代遺跡」『平成25年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』：43-50 新潟県教育委員会
- 鹿取 渉2015『佐渡市立金井小学校建設関係発掘調査報告書 東沢遺跡』佐渡市世界遺産推進課
- 鹿取 渉・相羽重徳2014「第Ⅲ章調査結果 6 佐渡地域の海揚がり品 概要・土器・陶磁器1」『縄文土器』『日本海に沈んだ陶磁器』：46-47 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 鹿取 渉・佐治栄次2007『県営ほ場整備事業（畑野東部地区）発掘調査報告書 晝場遺跡』佐渡市教育委員会
- 金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会1977『堂の貝塚』金井町文化財調査報告書第Ⅱ集
- 川村浩司1993「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』：7-16 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村 尚2013「遺跡から見た古代の佐渡」『平成24年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』：29-36 新潟県教育委員会
- 神澤勇一1976「弥生時代・古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『駿台史学』第38号：1-25 駿台史学会

- 神澤勇一1983「日本における骨卜，甲卜に関する二三の考察—先史古代の卜骨・ト甲と近世以降の諸例との比較検討を中心に—(1)」『神奈川県立博物館研究報告』第11号：1-41 神奈川県立博物館
- 黒崎 直1999「古墳時代のカワヤとウブヤ—木槽樋の遺構をめぐって—」『考古学研究』第45巻第4号（通巻180号）：53-70 考古学研究会
- 湖南文化財研究院2007『光州東林洞遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』
- 小林達雄1983「総論」『縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ』：3-17 雄山閣
- 齋藤瑞穂2012「浜端洞穴研究序説」『新潟考古』第23号：145-154 新潟県考古学会
- 佐藤俊策1998「二見半島の古い古墳」『図説佐渡の歴史』：52-53 株式会社郷土出版社
- 新免歳靖2016「新潟県南魚沼市飯綱山27号墳出土ガラス玉の化学分析」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』16：1-8 新潟大学人文学部
- 滝川邦彦2007『台ヶ鼻古墳』佐渡市教育委員会
- 滝沢規朗1999「第3章弥生時代・古墳時代第3節集落」『新潟県の考古学』：247-254 新潟県考古学会編 高志書院
- 尾崎高宏・滝沢規朗2006「佐渡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相—旧佐和田町二宮加賀次郎遺跡を中心に—」『新潟考古』第17号：105-127 新潟県考古学会
- 寺崎裕助2002「縄文時代の佐渡～土器文化の始まり～」『まほろばの時代』佐渡歴史民俗叢書Ⅱ：107-142 両津市郷土博物館
- 寺崎裕助2014「第Ⅳ章まとめ 2各時代の海揚がり品 縄文時代」『日本海に沈んだ陶磁器』：52 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 栃木英道1999「塚崎遺跡」『金沢市史資料編19 考古』金沢市
- 中川成夫・本間嘉晴・椎名仙卓・岡本 勇・加藤晋平1964「考古学からみた佐渡」『佐渡 自然・文化・社会』：48-97 平凡社
- 長沼 孝1984「遺跡出土のサメの歯について—北海道の出土例を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第1号：1-28 日本考古学会
- 新潟県1983『新潟県史資料編1』原始・古代1 考古編：122，図版745・746
- 新潟大学考古学研究室2003「新潟大学考古学研究室2002年佐渡調査報告」『佐渡・越後文化交流史研究』第3号：1-57 新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 新納 泉・北條芳隆1992「古墳時代 8 祭祀」『図解・日本の人類遺跡』：184-187 東京大学出版会
- 橋本博文1999 a 「抜歯」『環日本海地域の自然・人・文化』：41-43 新潟大学

- 橋本博文1999b「赤い鶏」『環日本海地域の自然・人・文化』：101-102 新潟大学
- 橋本博文2000「考古学から見た佐渡の魅力とエコミュージアム構想」『佐渡を世界遺産に』：87-102 新潟日報事業社
- 橋本博文2004a「3世紀の越の建物と墓制」『邪馬台国時代の越と大和』：75-82
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 橋本博文2004b「(9)考古資料から分かること」『博物館ボランティア養成セミナー記録集』：119-140 新潟大学旭町学術資料展示館
- 橋本博文2014「第6章 古墳時代のまつり」『斐太歴史の里の文化史』：135-165
妙高市教育委員会
- 橋本博文ほか2009「報告 新潟大学考古学研究室2008年度佐渡調査報告」『佐渡・越後文化交流史研究』第9号：左1-44 新潟大学大学院現代社会文化研究科・新潟大学人文学部プロジェクト佐渡・越後文化交流史研究
- 春成秀爾1982「縄文社会論」『縄文文化の研究』8：223-252 雄山閣
- 藤田富士夫1990「佐渡と沿岸地方の考古学」『日本海と北国文化』：94-112 小学館
- 牡丹山諏訪神社古墳発掘調査団2015『牡丹山諏訪神社古墳第2次発掘調査現地説明会』：1-4
- 本間嘉晴・計良勝範1988「旧石器時代」『佐和田町史』：493-505 佐和田町
- 山口忠明2006「蔵王遺跡について」『新潟県考古学会第18回大会研究発表要旨』：6-11 新潟県考古学会
- 藁科哲夫・東村武信1988「佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分布」『佐渡考古歴史』会報12号：1-16 佐渡考古歴史学会